

タブマネってこんな人

① 石川県小松市役所地域振興課 中貞治

石川県小松市役所地域振興課で多文化共生担当をしています、タブマネ第 26 期中貞治と申します。



当市では H31 から「外国人サポートデスク」を開設し、相談員が外国人住民の行政手続をサポートしています。また、小松市国際交流協会には「外国人くらしの相談窓口」を開設し、母子健診やアパート賃貸契約、ワクチン接種予約等の外国人住民のさまざまな相談に対応しています。相談員を通してわかるのは、あらゆる場面で多言語対応が第一に求められているということです。

私が担う役割は、多文化共生の意識啓発や周知によって、「外国人対応は担当者（部署）が対応するもの」という考えから、より広い範囲で「市全体が対応するもの」であるという認識を変えていくことだと思っています。各窓口への通訳機器設置のほか、通知・申請書の多言語化の推進、多言語化したホームページにリンクする QR コードの通知封筒への印刷等を実施し、また災害時の多言語支援体制の構築や医療を受けられる環境の整備についても、手探りの中少しずつですが実現に向けて進めているところです。

幸いなことに、全国にはお手本となる先進事例がいくつもあり、タブマネや他の研修で広がったネットワークによってさまざまな施策を参考にできる環境にあります。これからも小松市に多文化共生の風土を醸成するための一員として取り組んでいきたいと思えます。

② (公社) 北海道国際交流・協力総合センター (HIECC) 松原有希

(公社) 北海道国際交流・協力総合センター (HIECC) の松原有希と申します。

当センターでの業務に就いた2年前に、多文化共生マネージャー認定研修の受講機会に恵まれました。思い返せば、緊急事態宣言等が繰り返されるコロナ禍でしたが、奇跡的なタイミングで対面研修に参加でき、晴れてタブマネ 28 期生となれました。

研修会では、多文化共生分野の第一線でご活躍の講師の方々から、実体験や事例を含めた貴重なお話を直接うかがう機会や、全国から集まる熱意ある受講者の皆さんとのグループ演習を通じて様々な手法を知るなど、かけがえのない経験と、つながりを持つことができました。受講を検討している方には、ぜひ参加をお勧めします。

現在、多文化共生チームに配属され、災害時外国人多言語支援に関する訓練等、道内の多文化共生に関わる業務を担当しています。特に昨年度は休眠預金等活用事業に採択され、当センターが実施した「北海道在住外国人緊急支援プロジェクト」において、食料支援や日本語支援等の業務に携わりました。改めて実感したのは、広域な北海道での多文化共生等の取り組みは、地域の実態をよく知る各自治体や関係団体の協力なくしては成り立たないということです。何より在住外国人の皆さんに直接支援をお届けできたことは、私自身とても喜びを感じるとともに、学ぶことの多い事業となりました。



まだまだ学ぶことが多くあり、研鑽の必要性を痛感する日々ですが、今後も知見を深めることを怠らず、外国人支援のみならず、ともに社会の一員である外国人の皆さんと一緒に、安心して生活できる一助になれるよう努めていきたいと、心を新たにしています。

どうぞよろしくお願い致します。

③ 鳥取市国際交流プラザ 川口（呉）斐斐（フェイフェイ）

私は台湾生まれ、台湾育ちで、19歳の時、日本の大学に留学し、卒業後東京日本橋の会社に就職、その後結婚しました。夫が鳥取県出身ということで、二人の子供と共に鳥取市に移住し、移り住んだ二年目から「鳥取市国際交流プラザ」で、外国人の生活支援などに関わりながら8年間働きました。



現在の主な仕事、活動内容などは以下の通りです。

- ・鳥取大学及び鳥取環境大学 中国語・日本語講師
- ・公益財団法人 鳥取県国際交流財団 理事
- ・日華ふれんず多文化教室 代表
- ・Sun-in 台湾人会 会長 他

タブマネになったのは、鳥取県内の多文化交流イベントにおいて、県外から招かれたタブマネ講演で初めてその存在を知りました。その時、鳥取県内のタブマネはゼロでしたが、普段私がしていることこそがタブマネの活動そのものではないかと思い興味を持ちました。

現在は、鳥取県内の様々な場所（公民館、行政機関、学校など）で、私自身の経験を踏まえて「外国人人権について」、「母語と母国語の違い」などの講演をしています。世の中の現状、教科書で学べない多文化共生の実態などを伝えています。

人にアドバイスできるほど経験は積んでいませんが、タブマネ研修の一日目の授業の中で、田村太郎先生の次のことばが頭から離れません。涙が出ました。

神戸大震災の時、“生き埋めになった人を助けるときは国籍関係なく「命」を助けるんだ”

タブマネは人も自分も幸せにする存在だと思います。

④ 宮崎市国際交流協会 新里 淳一

タブマネ7期生（2009年度）、宮崎市国際交流協会です務局長として勤めております。
某運輸会社において、通関士として輸出入貨物の申告業務を、船舶代理店係として外国船が入出港する際に検疫・通関・船員の入出国手続き等の業務を約10年間しておりました。京都生まれですが、ルーツは沖縄にあります。

宮崎市国際交流協会(以下“MCIA”と表記)は、宮崎市の国際交流活動を促進し、国際親善と宮崎市の活性化に寄与することを目的として1993年に設立されました。

MCIAは行政、市民、外国人コミュニティ、JICAなどと連携を図りながら多様な活動を展開しています。活動に参加するきっかけは口コミの力が大きく、地域に浸透していると自負しています。

在住外国人を対象とした安全講習会や日本の文化体験、そして留学生と自治会の人々が共に参加する清掃活動は、地域と外国人を繋ぎ交流を促す機会に加えて環境問題、SDGsを考える場にもなっています。一番人気は料理を通じた異文化交流で、MCIAのウェブサイトには各国料理のレシピが掲載されています。

姉妹都市である韓国・報恩郡と宮崎市の中学生との交流は毎年行われ、コロナ禍においてもオンラインを活用して継続しています。

多文化共生事業数の中で、最も注目していただきたいのが「コソダテ・カフェ」です。市内に住む子育て中の外国人住民や外国にルーツのある方が気軽に集まれる場所としてスタートし、彼らの孤立を防ぐと共に外国人と日本人の交流の場になっています。大切にしているのは「母語で話す場」の提供です。

今後は、外国人が集まり市民との交流できる場をより多く提供し、技能実習生、企業の方を繋げる役割を担っていきたいと思います。MCIAの職員はわずか4人ですが、少数精鋭のメンバーが様々なセクター、アクターと連携しながら工夫を凝らし、一味も二味も違うイベントや事業を企画しながら、外国人と日本人、外国人同士の密な関係性づくりを促進してまいります。



⑤ 一般社団法人南相馬パブリックトラスト ケラー 由美絵

子供の頃から「世界」に興味があり、海外生活も経験、外国にもルーツを持つ子の親になった私ですが、「多文化共生」という言葉を初めて知ったのは、東日本大震災後の避難生活から戻り国際交流協会で働くようになった2017年のことでした。

そして2019年に受講した「多文化共生の地域づくりコース」で田村太郎先生に「多文化共生の施策ができない自治体は滅びる！」と（冗談半分に）聞かされ衝撃を受けたのがタブマネを目指したきっかけになりました。私の住む福島県浜通りは2011年のトリプル災害の影響もあり、多文化共生に対する働きが大変遅れていると感じていたからです。

2020年に「多文化共生の実践コース」を受講し、講師や同期の皆さんから大きな学びを得ました。特に「先行例がたくさんある。遅れている所は既存の物をどんどん活用していけばいい」と聞けたこと、全国に広がるタブマネのネットワークに繋がれたことが私にとって最大の収穫でした。

タブマネに認定されまずやるべきは、地域で「多文化共生」の重要性の認知度を上げることだと考え、小学校で多文化共生に関する出前講座を行う、「多文化共生のガイドブック」を発行する等の活動を行ってきました。

昨年度末に所属していた国際交流協会が解散となり直接的な活動は難しくなりましたが、これからも一市民の目線で多文化共生について考え、自分なりの取り組みを続けていく所存です。



⑥ 奈良市総合政策課 井窪 明美



私のこれまでの業務を振り返らせていただきたいと思います。

実は、多文化共生の研修を受講した時、まったく多文化共生の分野には携わっておりませんでした。採用後初めて配属された介護福祉課にいる時、タブマネの研修があることを知り受講しました。

入庁当時から、漠然と海外の人も支援できるような人になりたいと思っていました。それは、当時日本に住んでいた海外の友人の「日本は大好きだけど、永住はできないと思う。外国人には厳しいから。」との言葉がずっと心に残っていたからです。

研修では、一緒に研修を受けたタブマネ 26 期生の方々の熱量に触れ、刺激をたくさん受けました。

4 年間の介護保険業務の後は、一年間、非営利活動法人新公益連盟に研修に行きました。様々な社会課題に奮闘する方々にお会いし、恥ずかしながら初めて NPO の方々がどのように活動をしているか知りました。社会課題の解決に尽力されている姿を見て、ここでも大変多くの刺激を受けました。

この貴重な経験を今後の業務でどのように活かせるのだろうかと考えていましたが、今年の 4 月から市長特命事項等を担当する総合政策課に異動し、すぐにウクライナ避難者を市で初めて受け入れることが決まりました。

手探り状態で支援を開始しましたが、タブマネ 26 期の方にたくさん助けてもらったり、NPO 研修でお世話になった団体様とも連携させていただき、継続的な支援を行うことができています。

実務経験ゼロでここまでできましたが、タブマネの輪に支えられ、活動することができています。今、ウクライナ避難者の窓口は他部署に移りましたが、今の担当者にもタブマネの研修よかったですよ、とおすすめています。それくらい、研修自体は短いものでしたが、あの研修に行かせてもらってよかったと感謝しております。

これまでの経験を思い出だけにせず、目の前の人のために、行政職員として何ができるのか考えて活動していきたいと思っています。

⑦ 小山市国際政策課 木下 怜

皆さんはじめまして、タブマネ29期（2021年受講）、小山市役所国際政策課の木下と申します。

小山市という自治体を初めて聞いた方もいるかもしれませんので、少し市の紹介をします。小山市の読み方は、「こやまし」ではなく「おやまし」です。栃木県の南部に位置し、東京から新幹線で約40分と交通アクセスが良く、人口は約16万人で県内2番目の都市とされています。外国人数は約7,000人、人口割合も約4.2%と外国人集住地域の一つといえるような自治体です。

私は、今小山市役所の国際政策課で多文化共生社会の推進や外国人支援・相談といった事業を行っていますが、元々は市役所職員ではなく、法務省の出入国在留管理庁（入管）から出向して勤務しています（2020年4月～）。入管ではこれまで出入国審査や在留審査といった、いわゆる「管理」の色合いが強い役割を果たしてきましたが、2019年4月から、受入れ環境の整備や在留支援といった新たな業務を担うこととなりました。私がタブマネになろうと思ったのは、今の仕事がこれまで私が従事してきたものとはある意味180度違う分野であり、多文化共生を推進する上での新たな学びを得ながら、多くの方とつながりたいと考えたからです。



ありがたいことに、庁内外で外国人に関わる事業の企画、運営、助言等に携わらせてもらっています。まだまだ勉強中ではありますが、入管職員としての知識も活かしながら、市の共生社会推進を図る一翼を担えるよう頑張ります。

⑧ 一般財団法人港区国際交流協会 平野 智子



こんにちは、タブマネ 23 期の平野智子と申します。2012 年に港区国際交流協会に入職しました。4 年目に入り、日々の業務にはすっかり慣れつつも、自身の多文化共生領域における基礎的な知識や実践経験の不足に、行き詰まりを感じ始めるようになりました。ちょうどそのタイミングで、お世話になっていたタブマネの先輩方に勧められ、タブマネ研修を受講しました。

研修から得られたのは、予想していた以上に大きなものでした。多文化共生の地域づくりに取り組むタブマネ仲間との出会いは、今に至るまでの原動力になりました。期や地域の枠を越えた相互交流によって育まれた集合知や、先輩方が培ってこられた実践の術も、日々の課題に向き合うなかで、とても大きな支えになっています。

現在は多言語による相談事業や地域日本語教育事業などを担当していますが、活動をとおして、ルーツや国などに関係なく、私たち一人ひとりが多様な存在であるということを実感する毎日です。それは誰にとっても多文化共生が「自分ごと」であるということに他なりません。また、国際交流協会の取り組みは、地域の人々やコミュニティ、行政、団体や企業など、さまざまな主体との連携が不可欠ですが、ここでもまさに文化の多様性を感じることがあります。わかりあえなさから苦しくなる場面もたくさんありますが、連携することによって「できること」が増えますし、ダイナミックな活動につながることもあります。今後も対話をあきらめないで、港区での学びと実践を、地道に積み重ねていけたらと思います。

⑨ 公益財団法人香川県国際交流協会 山下 理香

タブマネ 28 期生です。香川県国際交流協会が多文化共生のまちづくりや国際理解教育に関する事業を担当しています。以前は海外で日本語教育関係の仕事をしていましたが、外国人として生活して苦労したこと、反対に、地元の人たちとつながり人生が豊かになったことなど、自分自身の経験を活かし、よりよい社会づくりに取り組みたいと思い、現在の仕事に就きました。

タブマネになったきっかけは、多文化共生のまちづくりについて学びたいと考え、タブマネ研修に参加したことでした。研修を通じて、地域の現状をよりよく知ることができたこと、そして、志を同じくし生き生きと活動されている講師や同期の皆さんに出会えたことが大きな刺激となり、「地域の未来のためにがんばろう！」という思いが強くなりました。

研修終了後、多文化共生のまちづくり事業を開始し、現在は県中部に位置する綾川町をモデル地域として、技能実習生と地域社会とのつながりづくりを中心に、同町及び香川県と共に取り組んでいます。今年で 2 年目となりますが、異なる人や機関が連携することの難しさを実感し、地域の特性を活かしつつ取組が持続可能なものになるにはどうしたらよいか葛藤する毎日です。しかし、多文化共生のまちづくりサポーター（町認定のボランティア）、大学生のプロジェクト、企業、監理団体、商工会など、取組の輪は少しずつ広がり、共感・協力してくださる仲間が増えてきたことが励みになっています。また、他の県や市町での取組について問い合わせさせていただいた際、どこの機関でも皆さんとても親切に対応してくださり、お話を伺うことで、新しい同志や仲間とつながることができたように感じ、心強いです。



各地で行われている取組がつながり、全ての地域に行きわたり、「多文化共生」を強調しなくても、それが当たり前の社会になることを願いながら、自分にできることを続けていきたいです。

⑩ 沖縄 NGO センター 佐々木 綾菜



はいたい！ぐすーよーちゅーうがなびら（みなさんこんにちは）！

タブマネ 29 期生の佐々木綾菜です。生まれも育ちも大阪ですが、大学卒業後は沖縄に移住し、現在は沖縄 NGO センターで事務局スタッフをしています。

多文化理解や外国人の困りごとをテーマにした出前授業やイベントの実施運営のほか、沖縄市の「コザ インターナショナルプラザ（KIP）」という外国人相談窓口の運営に携わっています。ちなみに…沖縄の外国人といえばアメリカを連想しがちですが、法務省の最新データによるとネパールが1位です。小さな島に 120 以上の国と地域の人々が住んでいます。

タブマネ研修を受けたい！と思ったきっかけは、沖縄は地理的にも本土の取り組みを知る機会や情報交換の場が少なく、異なる歴史を歩んできた沖縄における取組のヒントを探りたいと思ったからです。

研修では業務を進める上で役立つ知識や、全国で奮闘する仲間に出会うことができました。1 番実感として残っているのは「1 人で抱えているモヤモヤをだれかと共有する場をつくったり、身近な人とのつながりや関係性を見つめ直してみる」ということです。さまざまな背景をもった人々との共生を目指すなら、まずは足元の共生が大切なんだと気づきました。

沖縄には「ゆいまーる（助け合い）」という言葉があります。私自身も気負いすぎず、外国人をはじめいろいろな人に助けてもらいながら、そのプロセスで沖縄の多文化共生に向けた取り組みができたらいいなと思っています。

⑪ 沖縄県宜野湾市基地渉外課 里村 圭祐



平成 31 年 3 月にタブマネ 26 期として認定を受けました。小さい頃から英語が好きで、外国人と関わる仕事がしたいと願い、地元の市役所に採用していただくことになりました。

タブマネになったきっかけは、人事異動です。着任当初は、何をしたらいいか全く分かりませんでした。が、タブマネ研修を経て、知識を蓄えていきました。

タブマネになる少し前から、手探りで動き出しました。やさしい日本語講座、多言語生活ガイドブック製作等、少しずつ経験を積んでいきました。幸い、課内にカナダ人の国際交流員がいたことや多文化共生に精通した特定非営利活動法人沖縄 NGO センターにご協力いただけたことが大きかったと思います。

特に印象に残っているのは、防災ワークショップの開催です。日本人住民と外国人住民が顔の見える関係性をつくることをテーマに、市内の公民館で防災関連のワークショップを開催しました。特に困ったことは、企画・構成です。その点、沖縄 NGO センター、防災士の稲垣暁氏、沖縄県、沖縄气象台、市防災担当等、多くの関係者にご協力いただきました。そのかいあって、当日は想定の 2 倍となる約 100 名の参加者があり、成功裡に開催することができました。この経験から、多くの関係者にご協力いただくことの大切さを感じました。

今後の目標は、日本語教室の開設に携わることです。日本語だけではなく、外国人住民が生活全般の悩み事等を気軽に話せるような居場所づくりに繋がればと考えております。全国のタブマネの皆様のご活躍を励みに、私も引き続き多文化共生に関わっていきたいと思います。

⑫ 公益財団法人仙台観光国際協会 八巻 優子

タブマネ 26 期の八巻です。仙台観光国際協会に勤務し、現在は仙台多文化共生センターの窓口相談や多言語資料の作成等を担当しています。

自分の留学経験が「仙台に住む外国人の役に立てば…」と国際交流を楽しむ気持ちで勤務していた入職当時。翌年、2011 年の東日本大震災が起これ、非日常的な生活の中で、外国人を取り巻く状況や地域社会との課題を目のあたりにし、外国人支援に従事する自分の役割についての考えが大きく変わったことを覚えています。また、ボランティアや関係機関との繋がり的重要性を認識したのもこの時でした。

タブマネ研修には、上司から「研修に参加すると全国に知り合いができるし、講師の皆さんもとっても面白いから参加してみて！」と勧められ、受講を決めました。

様々な立場で多文化共生に携わる皆さんとの出会いはとても刺激的で、それまでは自分の地域ばかりに目を向けていましたが、各地の事例や取り組みについて学び、新しい視点から外国人支援の現状と課題について考える機会となりました。

今後も、全国のタブマネの皆さんとのネットワークを大切にして、多様な背景をもつ外国人が地域の一員として活躍できるまちづくりを目指し、事業に取り組んでいきたいと考えています。

皆さま、仙台にお越しの際は、ぜひ仙台多文化共生センターにお立ち寄りください😊

